

ヤスクニ・レポ 271

日本復帰 50 年「美ら島おきなわ文化祭2022」 「第 37 回国民文化祭」

川越 弘(日本キリスト教会沖縄伝道所牧師)

10月22日(土)~11月27日(日)、沖縄は「美ら島おきなわ文化祭2022」を行います。これは、2019年10月29日、文化庁が2022年に「日本復帰50年」を迎える沖縄で、「第37回国民文化祭」を開催することを内定して、沖縄の玉城デニー知事に内定書を手渡したことから始まります。

「国民文化祭」とは、アマチュアを中心に、歌や演奏会、演劇、民俗芸能、囲碁、将棋、民謡・太鼓・空手・ダンス・オペラ・ミュージカル上演、美術作品展示、茶会、考古学講演会などの様々な文化活動を発表して交流するものです。その時、天皇徳仁が沖縄に来て「おことば」を語ることになっています。

来年2021年、宮崎県と和歌山県で国民文化祭が2回も開催されました。宮崎国民文化祭は、今年20年の開催予定が新型コロナウイルス感染拡大のため来年に延期となり、21年予定の和歌山国民文化祭はそのまま延期せず、宮崎と同年開催となりました。この無理な同時開催は、2022年沖縄国民文化祭を何がなんでも実施するためと考えられます。

沖縄の「日本復帰」50年までに、日本政府はこれまで推し進めてきた琉球諸島全域への自衛隊配備を完成する予定です。与那国・宮古島・石垣島・奄美大島に部隊を配備し、辺野古・高江・伊江島に一大総合基地を確立して、中国や北朝鮮を仮想敵国として、米軍と連携して戦争の出来る国を構築するものです。今は「台湾有事」を問題としています。

歴史をふり返れば、77年前、沖縄住民に国体(天皇制)護持の沖縄戦(「捨て石決戦」)を強いたときも、

皇軍(第32軍)を奄美大島、徳之島、沖縄島、宮古島、石垣島、西表島、大東島に配備しました。日本国家は、かつて今も、沖縄の諸島と人々を戦争の最前線に置くことに必死なのでしょう。さらに当時の安倍前政権は、焼失した首里城の復興を日本政府の手で行うと公言しました。玉城知事は「本土復帰50周年」までに、首里城の再建計画を策定すると発表しております。この焼失した首里城は、1985年12月、西銘知事の時代に全額国費で復元されたものです。当時の政府自民党の首里城復元に積極的であった最大の理由は、返還された「沖縄と日本との一体化」であったのです。

今般予定されている「日本復帰50年」国民文化祭は、独自の沖縄文化を日本文化(天皇文化)の一つとして取り込み、沖縄の人々を文化的・精神的に同化しようとするもので、首里城再建計画によって大きな一歩を踏み出します。これまでの「沖縄戦と天皇の戦争責任謝罪運動」や「沖縄の自己決定権と独立運動」や「辺野古新基地反対運動」など、闘い続ける沖縄の人々を統治する仕上げとして、天皇を使って本格的に乗り出してきたと言えましょう。しかも、誰でも受け入れやすいアマチュアの文化交流を用いて取り込もうとするのです。私たちは、このような企みを看過することはできません。この国家のからくりを目覚め、天皇制と沖縄の歴史、そして天皇制と沖縄戦の事実を認識することこそ、沖縄に住む私たちと日本人の意識の根底になければなりません。

2022年9月16日例会奨励

「鍵の権能」マタイ16章19節、ヨハネ3章31—36節
須田 毅(日本福音キリスト教会連合 西堀キリスト福音教会牧師)

当教会は単立教会であり、当教会が属している日本福音キリスト教会連合は単立教会の連合体という教会の形態を持っています。かつてある改革長老教会に仕えておられる牧師は、「単立教会の弱点は、いわゆる中会訓練、つまりは教会の中での職制に就

く者たちの職務に関して学び、教会形成に資する訓練を積み重ねることができないことだ」と指摘されておられました。それは単立教会に属するものとしては非常に悔しい心情を抱かせる言葉でしたが、凶星であることを身に染みて感じました。

その点からも、単立教会であっても、主イエスの教会らしいあり方を求めたいという役員会全体の願いもあり、足りないことだらけではありますが、役員会形成のために学び続けています。

教会政治について教える書物を役員会内で読み続けていた時に、「鍵の権能が教会に委ねられている、特に長老に(場合によっては執事にも)ある」という文言に出会いました。鍵の権能とは「聖なる福音の説教とキリスト教的戒規」(ハイデルベルク信仰問答 83)と教えられてきました。ある執事は「これは、基本的には『戒規』のことを言っているのであり、私たちは祈り深く戒規を執行するための責任があることを指摘していると理解すればよいのか」と問いかけました。確かにその発言は正しいと一同理解しました。しかし、しばらく話し合いながら「戒規と同様、説教がきちんと語られる、ということとは重要であろう」とも話し合われました。

「説教」という語を聞きますと、牧師の責任範囲だと考える方が多いと思います。しかし、「み言葉を語ること」と広く理解するなら、キリスト者すべてが説教しているとも言えます。信仰について語り、信仰によって生きる姿そのものが、みことばを語っていることだとさえも言い得るでしょう。教会の肢々が、み言葉を語っています。

ヨハネ福音書 3 章のみことばは、上記信仰問答 84 において、「そのような福音の証言によって、神は両者をこの世と来るべき世において裁こうとなさるのです」と述べている根拠聖句です。ヨハネ 3:34 「神が遣わした方は、神のことばを語られる。神が御霊を限りなくお与えになるからである」とは、教会政治の基本を思い起こさせます。教会は人が統治する場ではなく、「みことばと霊の統治」が為されている場です。みことばが霊によって人々のうちに理解され、その教えによって教会が治められています。

信仰によって現実を生きることに於いて、私たち教会は福音と神の霊によって治められなくてはなりません。教会にゆだねられた「鍵」は天と地上との間にある鍵でしょう。教会において福音が良く聞かれることで、天への扉を開かなければなりません。天の神がもたらす、霊のたまものを豊かに受け取らせるのは、神のみ言葉がしっかりと語られることが前提です。そして、み言葉と霊の統治によって、教会がその賜物を受け取ることによって、教会は天に至る扉が大きく開かれていることを知ることができ

ます。

戒規は逆に、天への扉が鍵によって閉じられていることをイメージします。神に背く罪は、地上の世界においては常にあることですが、天に入り込むことはありません。教会において戒規が執行される場合には、天への鍵をしっかりと閉めることがひとつの重要点ですが、同時に、罪の赦しが明らかにされることが必要です。そこでもやはり、主イエスの十字架の恵みが十分に語られる必要があります。

「集い」に結集する私たちは「福音主義」を自認しています。教会史上では、プロテスタントと同義ですが、どちらかという「福音派」という意識の方が自意識としては強いかもしれません。聖書信仰に立ち、聖書に聞き従う素朴で固い信仰に生きる教会を形成したい、という祈りが「福音派」という名に込められているように思います。しかしそれは、「教皇主義(カトリック)」に対抗しての「福音主義」と全く異質のものではないでしょう。福音のもたらす恵みに生きるべく、宗教改革の動きが始まったことと、私たち福音派の現在のスピリットは、大いに重なる領域があります。

しかし、福音派が本当に「福音」派なのか、という問いは、現在の福音派教会のお互いの中で、たびたび考え続けるべきものでしょう。そして、福音派ゆえに、福音に聞き続けるゆえに、社会的課題ともしっかりと取り組まなければならない、という意識は大切だと思います。むしろ、「みことばと霊の統治」によって、現在の日本社会に置かれているキリスト教会福音派は、神の義や聖と相反するような社会的状況に憂いを抱き、そして主なる神の恵みによって変えられていくことを、切に祈っているのではないのでしょうか。そうであるならば、みことばと霊によって生かされている教会の各器官は、神によって派遣されている先々で、この世の戦いを経験し、雄々しく戦わざるをえません。

現実の戦いにおいて、疲れ切ってしまうような兄弟がなんと多いことかと思いますが、疲れ切った私たちを回復させてくださるのも、神の恵みの福音です。福音派教会は、かつてよりも今、福音から慰めや力を得ずして、地上での戦いを継続することは困難です。社会的課題との取り組みの低調は、福音を聞くことの低調と無関係ではありません。もっと、福音に聞く喜びが増すことで、社会的取り組みにも力が増すことを期待しなければ、と説教者として厳しくも希望を持ちながら、考えさせられます。